1　学校の生徒指導の状況を把握する

学校の生徒指導の状況を把握するために有効な情報には、次のようなものがあります。

◆調査や観察の記録
例）問題行動等の発生状況、遅刻・欠席の状況、児童の生活習慣の定着状況

◆学校や教職員の取組の記録
例）教育相談、家庭連絡・家庭訪問の回数、各教育活動の実施状況

◆児童への質問紙調査
例）公平さ、気配り、相談のしやすさ等、児童の目から見た教職員の指導やかかわり方

これらの中には、児童一人一人の情報として捉えることで「児童の実態の把握」に役立つものもたくさん含まれています。

また、自らが教育活動の実践者であり、上記の内容についても実際の児童の姿を通して感じ取っている**「教職員への質問紙調査」**も有効です。どのようなときに、どのような立場の教職員に対して行うのかについては、一般的に、右のような方法が考えられます。

それぞれの調査で、どのような項目を設定するかが大切です。全教職員が全方位的に行う際の項目については、P12に紹介しています。

教職員に対する質問紙調査

◆全教職員を対象に、学期末等定期的に、全方位的な項目について行う

◆全教職員を対象に、学期末等定期的に、各自の校務分掌に関する項目について行う

◆関係教職員を対象に、学校行事等重点的な教育活動の実施後に、達成状況と取組状況に関する項目について行う

さらに、実際の教育活動について公開したり、上記の内容を通知したりした上で、**「保護者、地域住民等学校関係者、第三者による評価」**を実施すれば一層多面的に把握できます。

各学校が、実態に応じた方法を確立しておくことが重要です。

【具体的な実践事例】

○本年度の「調査や観察の記録」や「児童質問紙調査の結果」を生徒指導担当教員（生徒指導部）が整理した上で経年比較等の分析を行う

○年度初めに全教職員に全方位的な項目についての質問紙調査を実施し、生徒指導担当教員（生徒指導部）が整理した上で重点項目を絞り込む

○保護者アンケート等の結果を教職員の評価と比較し、現状を多面的に捉える

実践事例①：全教職員への質問紙調査の項目を作る

ある学校では、学校の生徒指導の状況を把握するために、全教職員を対象に、学期末や年度末に、全方位的な項目を設けて質問紙調査を実施しています。調査項目は、次頁に示す生徒指導委員会のメンバーが、香川県教育委員会が設定した 16 の点検項目に対して、自分の学校の取組を盛り込んだ下位項目を作成しています。

［生徒指導委員会メンバー］
校長、教頭、教務主任、生徒指導担当、現職教育担当、特別支援教育担当、人権・同和教育担当、保健主事（養護教諭）、学年主任（道徳、特別活動担当）

行事や現職教育研究の視点など本校が今重点的に取り組んでいる内容を示すと、先生方も具体的なイメージをもって評価できますね。

例えば､県の点検項目３(4)は｢集団の一員としてよりよい学校づくりに取り組ませているか｣です。

「よりよい学校づくりに取り組ませる」とは、本校ではどのような場や機会に、どのような働きかけをすることかを生徒指導委員会のメンバーが協議し、具体的な下位項目を設けています。（表１）

こうして 16 項目の下位項目を設けた質問紙調査を全教職員に実施します。

表２は、項目３(4)の結果です。

生徒指導委員会では、各教職員の回答を集計・分析した結果を基に協議を行い、学校の生徒指導の状況を把握し、取り組むべき課題を明確にしています。

（表1）

３(4)集団の一員としてよりよい学校づくりに取り組ませているか	
①	ペア学年など異学年交流の場を通して成就感を味わわせているか
②	学級の問題をみんなで考え話し合って解決する指導がなされているか
③	清掃の仕方や用具の使い方を指導し学校美化の意識を育てているか
④	公共物を大切にする心を育てているか

（表2）

	十分	ある程度	あまり	不十分
３(4)	５%	６２%	３３%	０%
①	４%	７９%	１７%	０%
②	１３%	６１%	２６%	０%
③	８%	５２%	４０%	０%
④	８%	５２%	４０%	０%

16 項目中、3(4)など７項目で、否定的回答が 20%を超えています。これらが本校の課題と考えられますね。

３(4)は否定的回答が 33%。教職員は、異学年交流の成果を感じる一方で、集団としてのルールやマナーを高めたいと考えているようですね。

効果を上げるためのチェックポイント

○　要因や背景を探る

児童や教職員を対象とした全数調査は、集計作業に大変な労力を費やします。しかし、集計に留まらず、そこから傾向を読み取りその要因や背景を分析してこそ、改善策が見えてきます。そのためにも、計画的・組織的に進めることのできる体制の整備と時間的見通しが大切です。

○　学校行事等、教育活動の目標を明確にしておく

各教育活動の成果や取組に関する質問紙調査については、活動前に、その活動には生徒指導の機能に関連してどのような目標があるのかを明確にしておくことが大切です。例えば、「一年生を迎える会」であれば、１年、６年、他学年の児童にとってどのような目標があるのか、各学年団や各校務分掌担当の教職員はそのねらいの達成に向けてどのような指導・支援を行うのかが明確であってこそ、行事の価値もその後の調査の有用性も高まります。

○　各校務分掌の役割に生徒指導に関する内容を盛り込んでおく

各自の校務分掌に関する質問紙調査については、生徒指導提要にも述べられていますが、各校務分掌を分担する段階でその役割に生徒指導に関する内容を盛り込んでおくことが大切です。例えば、「給食指導」にはどのような生徒指導の機能があるのかを明示しておきます。そうすれば、取組後、担当者は生徒指導にどのようにかかわれたかを振り返ることができます。

２　児童の実態を把握する

児童は一人一人が違った能力・適性、興味・関心等を持っています。また、家庭環境や周りの友達との関係も異なります。そうした児童の実態を多角的・多面的かつ正確に把握してこそ、個に応じた適切な指導や支援ができます。

また、児童理解に向けた資料収集には様々な方法があります。

◆観察・面接

学級担任と過ごす時間の多い小学校においては、学級担任の日ごろからのきめ細かな観察や面接が大切であることは言うまでもありません。ただし、一面的な捉えに陥らないように留意しなければなりません。

複数の教職員や専門家による観察や面接も有効です。

◆質問紙調査

調査結果から児童一人一人の特性や集団の特性を把握します。

多角的・多面的な理解

個性や人格と言われるものは、極めて複雑な構成を持ち、その表れ方も多様です。実際の生徒指導では一人一人の行動傾向、すなわち行動に際してどのような判断力のレベルにあるのか、感情の動きはどうか、意志の強さや弱さなどはどのようであるかをとらえて指導に当たることが多いのですが、そうした知・情・意の動きの事実を知るだけではなく、その背景となる様々な事実をできるだけ多角的・多面的かつ正確に知ることが必要です。そのため、児童生徒を理解するために特に重要と思われるものは、能力の問題、性格的な特徴、興味、要求、悩み、交友関係、生育歴、環境条件などです。

（生徒指導提要より）

生徒指導提要には、この他にも様々な方法が紹介されています。また、児童がこれまでにしてきた検査や調査の経年比較、保護者や関係機関から寄せられた情報の活用も考えられます。

【具体的な実践事例】

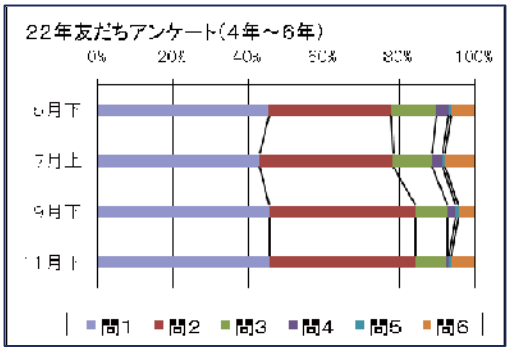
○学級担任等が質問紙調査等の結果と日ごろの観察記録を照らし合わせ、総合的に分析する
○複数の教職員、保護者、地域住民、医師、警察官等から資料を収集し、分析する

実践事例①：質問紙調査を継続することで変容をみる

ある学校では、年間数回、同様の質問項目で友達関係についての調査を行っています。継続的に行うことで、児童は悩みや気になることが書きやすくなるとともに、教職員は結果を比較し変化に気付くことができます。

また、職員会議や生徒指導委員会で協議して質問項目を工夫し、いじめや不登校等の悩みに早期に気付き対応できるようにしています。

こうした調査とその分析により、児童一人一人の様子や学年・学級の傾向が具体的に把握できています。



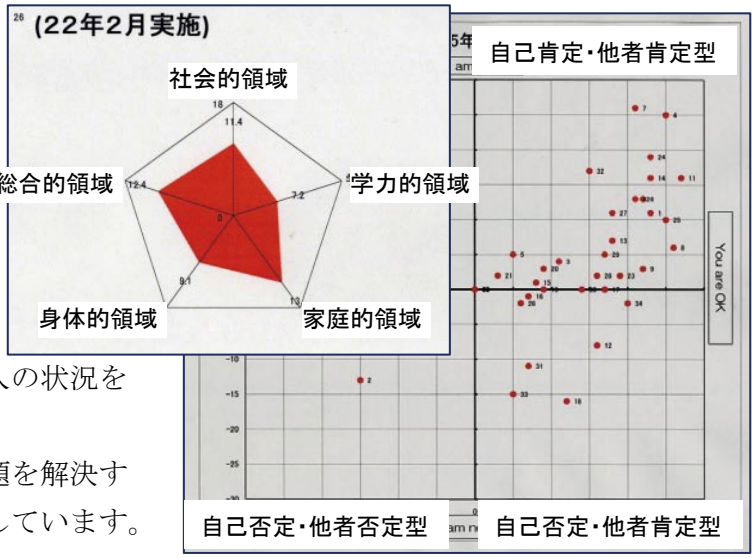
問１　うれしいこと　　問２　喜ばれたこと
問３　つらかったこと　　問４　たたかれたこと
問５　仕返しをすること　　問６　先生に言うこと

実践事例②：質問紙調査で個と集団の状況を把握する

ある学校では、児童一人一人について自尊感情の状況や、学級内での自己や他者に対する肯定感の実態を知るために、２種類の質問紙調査を年間２回（６月、２月）実施しています。

そして、調査結果を経年比較等により分析することで、児童一人一人の状況を把握し、指導に生かしています。

また、学級、学年、学校全体の課題を解決するために具体的な方策を考え、実践しています。

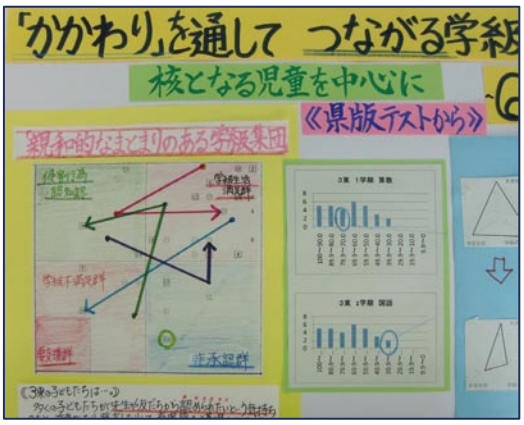


実践事例③：調査結果を基に、状況を分析し共有する

ある学校では組織的な取組を行うために、情報収集から学校全体での共通理解までの手立てを工夫しています。

例えば、集団性に着目した情報収集を通して児童の人間関係を把握し、課題が見つかった場合には、複数の教員による聞き取りを行うとともに、保護者にその事実を正確に伝えています。

このような取組により、従来は学級担任に留まっていた情報を教職員で共有し、児童への重層的な指導に結び付けています。



質問紙調査の結果と学習状況や友達関係をつなぎ、個や学級を見つめる

効果を上げるためのチェックポイント

○　未然防止の観点から、情報を慎重に解釈する

児童の言動あるいは質問紙調査の回答に何らかの問題が見られたとき、その言動だけを問題にするのではなく、児童の内面で高まっている思いやストレスが表出した言動と捉え、要因や背景の把握に努めることが大切です。

もしかすると、今見受けられるささいな言動は、生活態度がもっと大きく崩れていく予兆かもしれません。当該児童に注意深くかかわるとともに、保護者との連携を強め、学校での様子や家庭での様子などの情報交換を進めることが大切です。

学級や学校全体の集計結果についても同様です。結果の善し悪しを読み取るだけではなく、問題傾向の見られる事柄についてその要因や背景を分析することが大切です。